

# 子どもたちを守った「姿勢の防災教育」

～大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的行動に学ぶ～

片田 敏孝

群馬大学広域首都圏防災研究センター長・教授

## 1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災は、約2万人の死者・行方不明者を出す未曾有の災害となった。我々は、この大震災から何を学び、そして将来起こりうる巨大災害にどう備え、対応していけばよいのか。私がこれまで釜石市で取り組んできた津波防災教育、そしてその教えを実践し大津波から自らの命を守り抜いた釜石市の子どもたちの行動をふまえながら、以下に私見を述べる。

## 2. 東日本大震災をどう捉えるか

～今求められる命を守る主体的姿勢

### (1) 東日本大震災は「想定外」の出来事だったのか？

～二つの意味での想定

今回の大震災は、「想定外」という言葉で表現されることが多いが、本当にそうだったのだろうか。

自然災害に関する「想定」については、二つの意味で捉える必要がある。一つは相手は自然であり、あらゆることがあり得ると考えた場合の「想定」である。例えば、1771年に八重山諸島を襲った明和の大津波は最大波高30メートル以上にも及び、石垣島では80メートルの高所にまで津波が押し寄せたとされている。今回の大津波も、大いなる自然の振る舞いの一環として捉えれば、この「想定」に含まれる。しかし、これを「防災」に適用しようとする、その想定に対しては「対応不能」という事態もたくさん生じてしまう。そのため、防災においては、ある一定の災害の外力レベルを設定し、それを目標に施設等を整備することになる。すなわち、「防災における想定」という考え方がでてくるのである。

「防災における想定」とは、たとえば治水整備の場合は、100年に一回の確率で発生しうる降雨により生じる洪水を想定外力とする。津波の場合は、豪雨災害ほど発生頻度が高くないことから、確かな記録に残る過去最大の津波を想定外力とする。三陸沿岸での津波防災の想定外力は1896年の明治三陸津波、1933年の昭和三陸津波となり、これに耐え得る防潮堤や防波堤等の施設整備を行ってきた。今回の大津波はその想定外力を超えたということであり、その観点では「想定外」だったと言える。

しかし、相手は自然であり、あらゆることがあり得る

のだから、想定内・想定外という議論は不毛である。今回の大津波災害において、このような議論が展開されるのは、津波が防災における想定レベルをはるかに超えるものだったためである。

想定を超えたということになると、まず言われるのは「想定が甘かったのではないか」ということである。宮古市田老地区には、40年以上の歳月をかけて造られた、総延長2.4キロ、海面高さ10メートルの「万里の長城」と言われるほどの長大な防潮堤が二重に整備されていた。また、釜石湾には、30年の歳月と1,200億円かけて建造した、海底から約70メートルの高さをもつ、ギネスブックにも登録された湾口防波堤がそびえていた。これらの防潮堤や防波堤は破壊されはしたものの、市街地に流入する津波の規模を抑制し、また市街地への到達時間を遅らせることで避難のための猶予時間を与え、被害軽減のために少なからぬ貢献をした。これだけの規模の施設を整備してきたことに対して、単に「想定が甘かった」ということで括ってしまってよいのだろうか。

今回の大津波災害を受けて想定を見直すということは、1,000年に一回あるかないかという津波に備えた巨大なコンクリートの壁で日本の沿岸部を囲むことに等しい。果たして国民はそのような海岸を望むのか。また、財政逼迫の折、投資対効果の観点で妥当な投資なのか。そもそもいつ完成するのかもわからない。そう考えると、「想



写真-1 破壊された宮古市田老の防潮堤

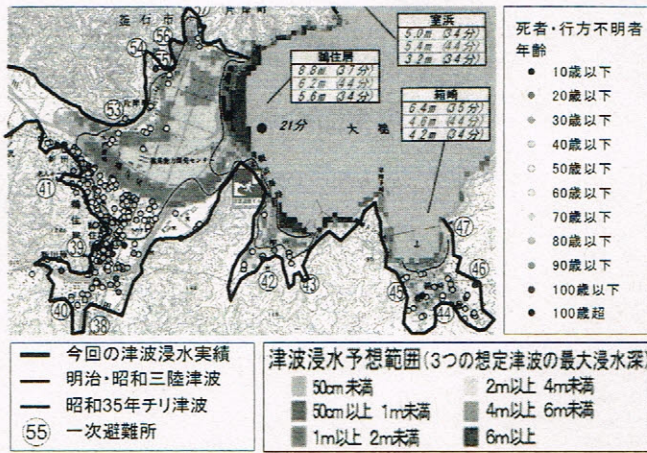


図-1 釜石市鶴住居地区の津波浸水想定区域と犠牲者の分布

作成：群馬大学災害社会学研究室

ベース図として、釜石市津波浸水想定区域図を使用

定が甘かった」、「想定を見直すべきだ」という議論は、少々短絡的なように思う。

## (2) 今回の大震災、何が問題だったのか？

### ～「想定にとらわれすぎた防災」

では、今回の大震災は何が問題だったのか。それは、行政も住民も「想定にとらわれすぎた」ということである。

行政については、想定レベルまでの災害を防ぐことに邁進してきたが、その整備が完了しない中で、想定を超える規模の災害への対応については十分に想起できなかった。すなわち、想定を超える超過外力に対しては無防備な防災体制だったといえる。

一方、住民については、防潮堤などのハード施設整備が進むにつれ想定外力までの小規模な津波は施設が防御するようになり、被災頻度は著しく低下した。その結果、災いをやり過ぎ知恵が忘れ去られ、「あの防潮堤があれば大丈夫」といった、ハード施設への依存意識が高まっていたことが挙げられる。

人為的に高める安全性は、ヒューマンファクターの脆弱性を高める。その傾向は、災害情報などのソフト面でも生じている。例えば、ハザードマップで浸水想定区域を示すと、浸水想定区域外の住民にとっては、あたかも行政が安全を保障してくれたかのごとく誤った認識をする傾向がある。釜石市の大槌湾の津波ハザードマップと今回の津波犠牲者の住所を重ね合わせてみると、浸水想定区域や過去の津波到達範囲に該当しない区域で犠牲者が多いことが明らかになっている。

そういう意味において、住民は防災行政に過剰に依存した状態であったとともに、行政から与えられた想定にとらわれすぎた状態にあったといえる。

## (3) 我々は災害にどう対応すべきか

### ～自らの命を守ることに主体的たれ

では、我々は災害にどう対応すべきなのか。それは、「大いなる自然の営みに畏敬の念を持ち、行政に委ねる

ことなく、自らの命を守ることに主体的たれ」ということに尽きる。

自然は我々に大きな恵みを与えると同時に、時に大きな災いをもたらす。それは、行政が想定した規模を超え、人為的に造りだした防御施設をはるかに凌ぐ大きさで襲いかかることも当然あり得る。そこから自らの身を守るためには、災いをやり過ぎること、すなわち避難することしかない。しかし現状は、災害対策基本法のもとで邁進してきた防災行政の中で、住民には「防災は行政がやるもの」との認識が根付いており、そのような認識のもとで、住民は災害に対する安全性を行政に過剰なまでに依存し、そして自らの命までも委ねてしまっている状態にある。

自然が時にその営みの中でもたらす大いなる災いから自らの身を守るためには、自らがそうした自然の営みの中に生きる一構成員であることを自覚するとともに、人為的に与えられた想定にとらわれることなく、また自らの命を行政に委ねることなく、主体的にそのときの状況下で最善を尽くすこと以外にない。今、わが国の防災に必要なことは、国民一人ひとりが自らの命を守ることに責任を持つこと、すなわち「自らの命を守ることに主体的たれ」ということだと考える。

## 3. 大津波災害から生き抜いた釜石市の子どもたち

### (1) 釜石市の児童・生徒の生存率 99.8%

今回の大津波災害による釜石市の死者・行方不明者は1,000人以上に上る。このうち、市内小中学校の児童・生徒で津波の犠牲になったのは、病欠等で学校の管理下になかった5人である。津波犠牲者ゼロを目指して取り組んできた者として、残念であり、無念でならない。しかし一方で、その他の小学生1,927人、中学生999人は全員無事だった。彼らは、主体的な対応行動をとり、大津波から自らの命を守り抜いたのである。

私は8年間、釜石市の津波防災教育、特に子どもたちへの防災教育に注力してきた。その中で私が子どもたちに教えたことは、津波から自らの命を守るための「避難3原則」である。釜石市の児童・生徒はそれを実践し、大津波から命を守り抜いてくれた。

### (2) 津波から命を守る「避難3原則」

#### ① 想定にとらわれるな

学校の津波防災教育で、まず子どもたちに教えたことは「想定にとらわれるな」、端的にいえば「ハザードマップを信じるな」ということである。

鶴住居小学校では、自宅や学校が津波の浸水想定区域から外れているのを見た子どもたちが、「学校はここにあるから安心だ」「自分の家は大丈夫だ」などと一喜一憂していた。そこで私は、「ハザードマップどおりの津波がこの次来るとは限らない。相手は自然であり想定外のことも起こり得る。そう考えると、たとえ自宅や学校が浸水域から外れていたとしても、大丈夫と考えるのは大変

危険だ」と説明した。子どもたちに自らが想定にとらわれていることを自認させること、そして、相手は自然であり、時として、人間の勝手な想定にとどまるものではないことを理解させたかったからだ。

②その状況下で最善を尽くせ

二つ目は、「その状況下で最善を尽くせ」。『ここまで来ればもう大丈夫』と考えるのではなく、そのときできる最善の行動をとれ、ということである。ここでは、釜石東中学校の子どもたちがとった行動を紹介したい。

2011年3月11日、約5分に及ぶ激しい揺れが続いた後、釜石東中学校の副校長先生は校内放送で避難を呼びかけようとしたが、地震による停電のため放送が使えなかった。

しかし、地震で揺れている最中から、校庭で部活動をしていた生徒たちは、「津波が来るぞ、逃げろ!」と校舎に向かって大声で叫びながら校庭を駆け抜けていた。中学校の他の生徒もこれに続いた。一方、隣接する鵜住居小学校の子どもたちは校舎の3階に避難しようとしていた。しかし、日頃から一緒に避難訓練をしていた中学生が一斉に避難する様子を見て、小学校の児童らは校舎を駆け下り、中学生の後に続いた。

こうして子どもたちは無事、予め避難先に指定していた老人介護施設「ございしょの里」に到着した。しかし、施設脇の崖が崩れかけている様子や、津波が防波堤にあたって舞い上がる水しぶき、津波が家々を壊す土煙を見た中学生が、点呼をとっている先生に「ここじゃだめだ」と言ってさらにその先の高台にある老人福祉施設へ避難することを進言した。再度全員で避難する途中、中学生は近隣の保育園から園児を連れて避難する保育士たちを手伝った。そして中学生らが避難する様子を見た近隣住民が、それにつられて共に避難した。無事全員が老人福祉施設に避難し終えたそのわずか30秒後、津波は老人福祉施設の目前まで迫り、そこで止まった。迫り来る津波をみた子どもたちは、そこからさらなる高台をめざしたのである。もしハザードマップの想定にとらわれて学校や最初の避難場所に留まっていたならば、とても生き延びることはできなかつただろう。

子どもたちは「想定にとらわれるな」「その状況下で最善を尽くせ」との教えを忠実に実践し、大津波から命を守り抜いたのである。

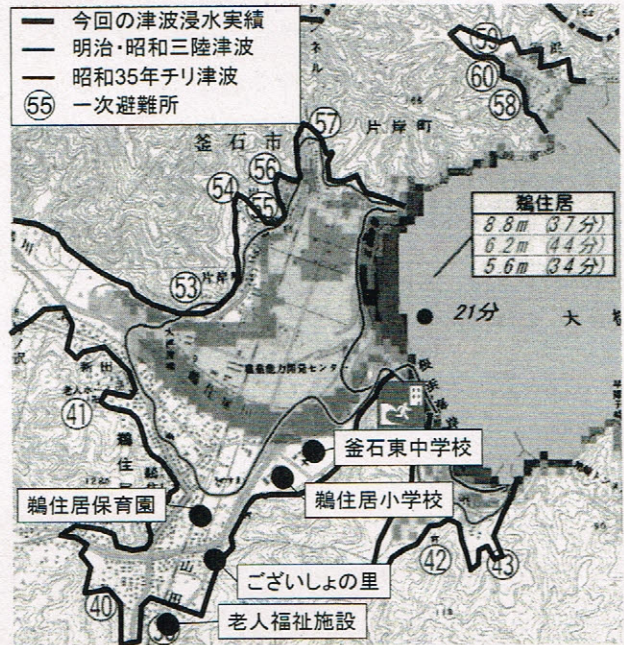


図-2 学校等と避難場所の位置

作成：群馬大学災害社会学研究室

ベース図として、釜石市津波浸水想定区域図を使用



写真-2 震災当日の津波避難の様子

鵜住居地区住民が撮影



写真-3 ございしょの里とその脇の山



写真-4 老人福祉施設（山崎デイサービスセンター）

### ③率先避難者たれ

三つ目は「率先避難者たれ」。まず自分の命を守り抜くことに全力を尽くせ、ということである。私は子どもたちに、「率先避難者たれ」の真意を説いた。

「人間はいざというとき、なかなか逃げるという決断ができない。例えば、火災の非常ベルが鳴っても、逃げずに周りの様子を見て留まっているだろう。非常ベルの意味は皆わかっている。しかし、逃げるという意思決定をできずにいるのだ。津波の場合、避難を躊躇していたら皆その犠牲になってしまう。自分が『率先避難者』となり避難することによって、皆の命を救うことができる。」

今回の津波でも、大挙避難する小中学生を見て避難した住民も多かった。率先避難者となった子どもたちは、周りの大人たちの命までも救ったのである。

#### (3) 主体的行動を導く「姿勢の防災教育」

釜石市の子どもたちに実施してきた防災教育はどのようなものだったのか。

これまで行われてきた防災教育の一つは「脅しの防災教育」である。「過去にこんな恐ろしいことがあった」といって災害に対する恐怖を喚起する、いわゆる「恐怖喚起コミュニケーション」に基づくものである。しかし、これは相手を脅すだけであり、あまり効果は得られない。なぜならば、人間は怖いと思う気持ちを持続できないからである。もう一つは「知識の防災教育」である。典型的な例はハザードマップである。ハザードマップも、その作成の前提を知ったうえで活用すれば有効なツールとなる。しかし、単に知識として与えられるだけでは、災害イメージの固定化を招き、それ以上のことが起こりうることを想起できなくなる。すなわち、「想定にしばられる」ことになってしまうのである。

これに対し、釜石市で実施してきた防災教育は、災害から自分の命を守る主体性を醸成する、いわば「姿勢の防災教育」である。今回、釜石市の中学生たちは、津波が迫る状況のなか、「避難3原則」に集約されるこれまでの教えに基づき主体的に行動した。だからこそ、津波から自らの命を守り抜くことができ、さらには小学生やお年寄り、保育園の子どもたちの命をも救うことができたのである。

## 4. 釜石で取り組んできた津波防災教育

### (1) 釜石市での津波防災教育のねらい

私が釜石市で津波防災教育を始めてから8年が経過する。当初は一般の方々を対象に防災講演会を繰り返していた。しかし、毎度参加者は同じ人ばかり、つまり防災意識の高い人ばかりであることに気付いた。そこで、その他大勢の防災無関心層に訴えかけるため、学校教育を糸口にできないかと考えた。

子どもたちを対象とした防災教育のねらいの一つは「災害文化」の醸成である。防災教育を受けた小中学生

は、いずれ成人となり、そして家庭を持つ。これにより、防災意識が家族間、ひいては地域間で継承されるようになり、やがてその意識が地域の常識として、「災害文化」として根付いていくようになることを考えたのである。

また、もう一つのねらいは、子どもたちへの防災教育を介して、それを家庭に広めるということである。生活に追われ防災講演会になかなか参加してもらえない小中学生の親世代でも、自分の子どものことであれば強い関心を示すと考えたのである。

この取り組みの最初で、私は小学生にアンケートを行い、「一人で在宅中に大きな地震があったら君はどうするか」と質問した。大半の答えは「お母さんに電話する」、「お母さんが帰ってくるのを待つ」というものだった。そのアンケートはその場では回収せず、子どもに家に持って帰らせた。そのアンケートには「お母さんへ」という項目があり、次のような質問を付していた。「お子さんの回答を見てください。あなたのお子さんは、次に津波が来たときに生き延びることができるお子さんだと思いますか?」。その翌日、学校の津波防災教育に関する問い合わせが保護者から殺到したとのことである。こうして、子どもの命を守ることを接点に、親世代との連携を図ろうとしたのである。

#### (2) 「津波てんでんこ」の真意を再考する

津波防災教育の最後に、私は子どもたちに次のように問いかけた。「君たちは教えたとおりに逃げてくれると思うが、君たちが逃げたあと、お父さん、お母さんはどうするだろう?」。すると、子どもたちの表情は一斉に曇った。お父さんやお母さんは自分を心配して迎えに来て、その結果どうなるかということも想像できるからだ。

私は続けてこう話した。「今日家に帰ったら、お父さんやお母さんに、『いざというときは僕は必ず逃げるからね』と、信じてくれるまでちゃんと伝えるんだ。お父さんやお母さんは、君たちが逃げると信じられなければ、きっと迎えに来てしまうよ」。一方、その日は授業参観日だったので、父兄に対しても「今日の授業をふまえ、お子さんが『津波が来るときには、僕は必ず逃げるから』と言うと思う。しっかり子どもたちの訴えを受けとめ、『この子は絶対に逃げてくれる』という確信が持てるまで、子どもの話を聞いてあげて欲しい。そして、確信が持てたら、『わかった。ちゃんと逃げるんだよ。お母さんも逃げるからね。あとで必ず迎えに行くからね』と、言葉をかけてあげて欲しい」と話した。

三陸沿岸には「津波てんでんこ」という言い伝えがある。津波のときはてんでばらばらに逃げないと家族や地域が全滅してしまうという教訓だ。家族それぞれがいざというときの行動を決めておき、お互いが避難していることを信じ合えていけば、自らの命を守ることに専念できる。

今回の震災後、私は釜石に何度か足を運ぶ中で、お父さんやお母さん方に声をかけられた。私が「お母さんは

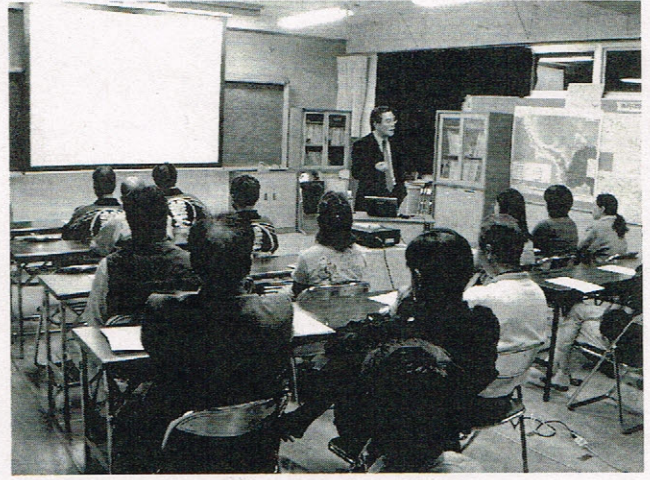
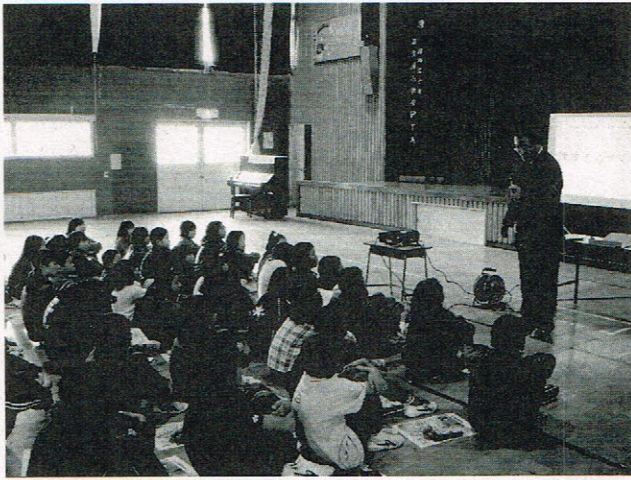


写真-5 子ども(左)・親(右)に「津波てんでんこ」の真意を語る

逃げられましたか」と聞くと、「うちの子は『津波が来たら僕は絶対に逃げるから』と、普段から言っていました。だから、私も『うちの子は津波が来ても、絶対に無事に逃げています』と信じて逃げました」と話してくれた。「津波てんでんこ」の教えが、子どもを介して大人にまでちゃんと行き届いていたのだ。「自分の命に責任を持つだけでなく、それを家族が信じあっている、そんな家庭を築いておけ」。これが、「津波てんでんこ」の真意ではないだろうか。

### (3) こども津波ひなんの家

#### ～津波防災教育を地域に波及させる

前述の参観日の後、親子で帰宅する際に、津波で危険な場所を確認してもらった。その際、子ども一人では避難が困難なところでは、付近の住民に「地震の際には子どもが避難してくるかもしれないので、どうか一緒に逃げてやって欲しい」とお願いに行くよう伝えた。そして、それを了承してくれた住民宅を「こども津波ひなんの家」に認定し、それを示すステッカーを配布した。

大人一人だけでは避難に踏み切れないが、近所の子どもを預かるとなると、一緒に避難せざるを得なくなる。すなわち、子どもの命を守ることが、自らの命も守ることにつながるのである。この「こども津波ひなんの家」に認定した住民には、「地震の際に『この程度なら大丈夫』だと思っても、子どもたちが駆け込んできたら必ず

一緒に避難して欲しい。津波が来なければ共に喜び、また地震があった時は来るんだよと、子どもたちを励まして欲しい」と伝えた。

このように、子どもの命を守ることを介して地域への津波防災を広めたのである。



図-3 こども津波ひなんの家のステッカー

### (4) 学校での防災教育

#### ～学校の先生と創った「津波防災教育のための手引き」

今回の津波災害において、釜石市の子どもたちの主体的な行動は見事なものであったが、その背景にあったものは、我々の直接的な防災教育だけにとどまらない。我々は確かに津波防災教育の足がかりをつくった。それを市内14校、中学生約1,000人、小学生約2,000人に対し、徹底的に教育したのは、我々の津波防災に関する考えに賛同を持って、一所懸命取り組んでくださった学校の先生方である。

子どもたちへの津波防災教育において重視したことは、子どもたちに津波防災への姿勢について考えさせることができるようにすることである。そこで私は、先生方と教材開発を行い、それを「津波防災教育のための手引き」としてとりまとめた。そこでは、防災について特別な時間を取るのではなく、既に組み込まれている各教科の中で教えることを提案している。

学校の先生方には、こうした授業の工夫のみならず、避難訓練や地域防災活動といった防災の取り組みについても尽力くださった。このような先生方の努力が、子どもたちの被害の最小化に貢献したことは言うまでもない。

### 5. これから求められる防災 ～人が死なない防災

#### (1) なぜこれだけ多くの犠牲者がでたのか

今回の震災で約2万人の死者・行方不明者が出た要因は、概ね以下の3点に整理できる。

まず1つ目の要因は、「想定にしばられていたため、十分な避難をしなかった」ということである。これまで述べてきたとおり、「過去の津波では大丈夫だった」「ハザードマップの浸水想定区域外は安全」「防潮堤があるから大丈夫」といったように、これまでの被災経験や行政から与えられた想定にしばられ、そのときの状況下においてまだとることができた最善の行動をとらなかったことが、津波による被災要因として少なからぬ割合を占めるものと考えられる。

2つ目の要因は、「身体的理由から避難することができ

なかった」ということである。警察庁公表資料より、岩手県、宮城県、福島県の死者の年齢構成と人口構成を比較すると、65歳以上の高齢層で人口構成比を大きく上回っていることがわかった。高齢者をはじめとする災害時要援護者の避難に関する課題解決なくしては、災害犠牲者ゼロの実現はあり得ないといっても過言ではない。

そして3つ目の要因は、「状況的に避難することができなかった」ということである。警察官や消防署員・消防団、行政職員など、住民の命を守ることを職責として負っており、状況的に自らが避難することが許されなかった方々に加え、要介護施設の職員や、要介護者を抱える家族が該当する。高齢の家族を抱えることが多くなる中年層の世代から死者の割合が増加傾向にあり、このことから、災害時要援護者の避難問題は、避難を支援する人の命をも守る方策を併せて検討することが重要となる。

(2) これから求められる防災 ～人が死なない防災

これから求められる防災は、「人が死なない防災」である。帰宅困難者問題や避難生活・避難所運営に係る問題、復旧・復興に係る問題などは、いわば「生き残った人のための防災」である。無論、こうした問題解決も重要であることは言うまでもないが、この問題は災害から人が生き延びてからこそ生まれるものである。やはり第一義として求められることは「人を災害で死なせないこと」であり、そのための防災であると考えられる。

最善を尽くした結果として命が守られる。避難所整備をはじめとする避難計画の検討と合わせて、国民一人ひとりが与えられた想定にとらわれることなく、その状況下で最善を尽くすこと、すなわち自らの命を守ることに主体的な姿勢をもつこと、そして、そのような姿勢を醸成する防災教育等の取り組みを実施していくことが、これから求められる「災害から命を守るための防災」として重要なことであると考えられる。

釜石市での津波防災教育は、子どもを介して家庭へ、そして地域へ普及することを目標に取り組んできた。しかし、取り組みを始めてから8年で「そのとき」を迎え

3 3 小学校5・6年生(6) 指導の概略

II 対処行動を知る B. 津波からの避難方法を知る IV 火人の経験しる B 津波でんごこ

指導する学年 小学校5年生 指導する時間 特別活動(学級活動) 指導する時期 1 時 間

目 的 津波が近づくと、安全に避難するための方法・心構えを理解する。

使用する資料 【写真①～④】過去の津波による釜石市の被害  
【資料②】今年30年間の地震発生頻率  
【資料③】津波避難のポイント  
【その他】津波ハザードマップ  
【point 38】津波避難のポイント

1. 導入  
(1) 釜石の過去の被害写真を見せ、このような津波が近い将来発生する可能性が高いことを紹介する。  
【写真①～④】過去の津波による釜石市の被害  
【資料②】今年30年間の地震発生頻率  
(2) 学習課題を把握する。

2. 展開  
(1) 動く津波ハザードマップを見て、津波の影響を受けた場所を確認する。  
【その他】津波ハザードマップ  
(2) 津波の発生時の特徴を確認しながら、津波から避難するときに注意する点を確認する。  
① 津波が発生したときに避難する  
② 津波が来たら、高いところへ逃げよう  
③ 一歩ずつ、津波が来たら、一歩ずつ逃げよう  
【資料③】津波避難のポイント  
(3) 「津波でんごこ」に込められた願いや人々の思いについて説明する。  
(4) これまで大きな地震が起きたときに、すぐに避難したかどうかを振り返り、今後、どのようなことに気をつけて避難すればよいかを話し合う。

3. まとめ  
(1) 学習して気付いたことをプリントに記入する。  
(2) 感想等を発表し、今日の学習をまとめる。

4. 確認  
(1) 津波が近づくと、安全に避難するための方法・心構えがわかったか？  
(2) 津波が近づくと、安全に避難するための方法・心構えがわかったか？

履 修 する 単 元 特別活動

3 3 小学校5・6年生(6) 指導の注意点

1. 導入  
(1) 釜石の過去の被害写真を見せ、このような津波が近い将来発生する可能性が高いことを紹介する。  
(2) 学習課題を把握する。

2. 展開  
(1) 動く津波ハザードマップを見て、津波の影響を受けた場所を確認する。  
(2) 津波の発生時の特徴を確認しながら、津波から避難するときに注意する点を確認する。  
① 津波が発生したときに避難する  
② 津波が来たら、高いところへ逃げよう  
③ 一歩ずつ、津波が来たら、一歩ずつ逃げよう  
【資料③】津波避難のポイント  
(3) 「津波でんごこ」に込められた願いや人々の思いについて説明する。  
① 過去の津波で被害にあった人々が、津波が来たらとにかく逃げよう  
② 津波が来たら、高いところへ逃げよう  
③ 一歩ずつ、津波が来たら、一歩ずつ逃げよう  
(4) これまで大きな地震が起きたときに、すぐに避難したかどうかを振り返り、今後、どのようなことに気をつけて避難すればよいかを話し合う。  
① これまで大きな地震が起きたときに、すぐに避難したかどうかを振り返り、今後、どのようなことに気をつけて避難すればよいかを話し合う。  
② 津波が来たら、高いところへ逃げよう  
③ 一歩ずつ、津波が来たら、一歩ずつ逃げよう

3. まとめ  
(1) 学習して気付いたことをプリントに記入する。  
(2) 感想等を発表し、今日の学習をまとめる。

図-4 釜石市津波防災教育のための手引き

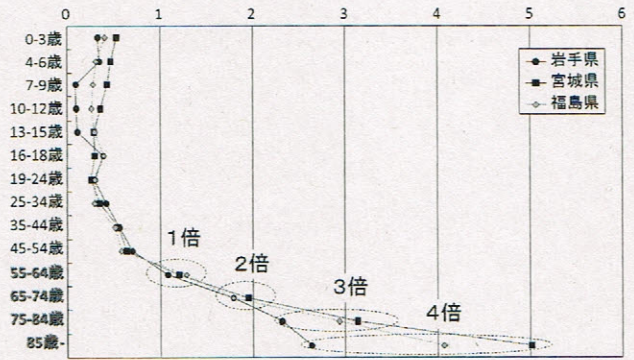


図-5 各年齢層における死者と人口との比  
※岩手県警、宮城県警、福島県警の死者人定表をもとに作成  
(2011.5.24現在)

※年齢不明者、住所が県外の死者は計上していない

てしまった。今回の大震災では、釜石市の小中学生の被害を最小限に抑えられたことにおいて、取り組んできた防災教育については一定の効果があったと言えなくもない。しかし、犠牲者ゼロが目標との観点からすれば、取り組みは道半ばであり、力及ばずというところであった。今後においては、東海・東南海・南海地震や、北海道沖での500年間隔地震津波の発生が懸念されている。今回の東日本大震災での教訓をふまえ、早急に沿岸各地に津波防災を展開しなければならないと考えている。